

『文政七甲申夏異国伝馬大津浜へ上陸並諸器図等』解題

歴史書によれば、一七三九年ごろから日本周辺にはロシア船の出没が見られた。その後、一〇〇年の間にイギリス船、アメリカ船、更にオーストラリア船の出没・来航が見られるようになった。以下、彼らの日本近接の状態、目的は通商、捕鯨、薪水の補給等と違ったが、日本にとって侵略の脅威は同様であった。

もつとも『桃蹊雑話』^{とうけい}には、「湊村、磯原村、水木村、三ヶ所に、異国船番所を置れしは、威公御代正保三(一六四六)年なり」と見えたり、……、但郡御奉行支配たるべき也」とある。右の部分は『水戸歴世譚』から引いたものである。これらの番所は、前述の脅威への備えにもなっていたであろう。ここで、威公は水戸徳川家初代藩主頼房である。

幕府は、オランダとは長崎を唯一の窓口として貿易を行い、同時に国外情報を得ていた。国外情報とは、たとえばペリー来航の一年前に、来航の通知を受けていた、などである。

当時の国外情報は、幕府から外に知られることはなかった。同時に、庶民、主に漁労者の得る異国船の視認・交流の情報総てが報告されることも少なかったと思われる。

『水戸市史』は、異国船について、次のように記述する。

「またこのころ(文化初年)、異国船が水戸近海に出没するようになり、家中の生活は一層緊張せざるを得なかった。異国船がはじめて水戸の近海鹿島灘に姿を見せて、水戸城下の人心が大いに動揺したのは文化四(一八〇七)年六月のことである。十数年前(筆者注・一七九二年、ロシア特使のラクスマンが、黒田光太夫を伴い根室に來た時を指すか)、ロシアの使節が根室に渡來した時でさえ水戸では大騒ぎであったから、近海に異国船が現れたという報せが水戸にはいった時の、城下士民の驚きが大きかったのは当然である。」

更に、項を設けて文政年間(一八一八—一八二八)の「異国船の那珂湊沖出沒」を詳述している。ここに引用する余裕はないが、一五件の「異国船関係事項」が記されている。そのうちの一件が「異人大津浜上陸」であり、これも項を設けて詳述する。

以上の『水戸市史』の中でも、漁労者などと海上での異国船とのかかわりについては記述がない。

一九世紀前半の日本沿岸に現れた異国船の多くは、薪水や食糧の補給を必要としていた。

本翻刻書の原本は、加藤松羅が収録した松羅館文庫の第四十三卷『文政七甲申夏異国伝馬大津浜へ上陸並諸器図等』である。

本書では、大津浜に上陸したイギリス捕鯨船員十二名の人相、名前から服装、携行品、食事の嗜好、生活習慣など、スケッチを交えて詳細に観察する。画かれたスケッチは、大型帆船から種々の人物像、日用品等に至る迄、数十点に及んでいる。そのなかに、漁労者と異国船と沖合での出遭いと物品の貰い受けや交換のことも出る。彼等の滞在は二週間に及び、離岸の際には、米、野菜、鶏等を給している。

さらに、沿岸警備に当たった藩側の人員氏名とその陣立て、浜々の住民への水戸藩の御達書、英単語の対訳、大津浜の現場絵図などを記している。

いずれも冷静で、感情を交えない記述であること、現地の村役人や住民たちが穏やかに上陸英人を接遇しえたのは、記録者と現地住民たちの文明の高さを表している。また、その接遇は当時の水戸藩要路者の対応方針によるものでもあったろう。

松羅館文庫第一〇三卷『海防之集説』には、ほぼ時を同じくして文政七（一八二四）年に起きたイギリス捕鯨船員等の薩摩藩領、宝島への上陸についても詳細に採録している。この事は本書でも触れている。

これらと、大津浜上陸船員への尋問に当たった水戸史館方筆談役会沢正志斎の『諳夷問答』に見る世界各国の情勢等をふまえて記述され、幕末の志士必読の書となった正志斎の『新論』における政治・外交のことを併せ読まれば、当時の外国人・外国人観を知ることができよう。

平成二十五年三月

堀江克己、柚原俊一